

ADULTSONLY

R18

成人向け

洗脳されて♡

隠れて♡

卑猥なポーズで♡

無限NTR♡

お外で♡

魔物と♡

船上で♡

仲間と♡

初対面おじと♡

朝まで♡

ホモセで強くなる

ちびっこ勇者♡

イケメン仲間達と純情恋愛しながら

ゆきずりおじさんとズブズブセックスNTR旅



#1 旅立ちの儀

～村中の男から欲力注入でアヘアヘ処女喪失♡～

少年は勇者になどなりたくはなかった。

ただ金が必要だったのだ。勇者に与えられる、莫大な支度金が……………。

「皆々様、本日はよくぞお集まりいただきましたな」

村長がうやうやしく一礼をする。

村民の男らは一様に歓声を上げるが、彼らが視線を集めるのは禿げて太った村長ではなく、傍らに控える桜色の髪をした可憐な少年その人だった。

その大きな瞳は不思議そうに、自分が着せられた透けた白装束を見下ろしている。

「本日成人を迎えるリアが、わが村の勇者として旅立つことと相成りました。つきましては、ここにいらした皆様で旅立ちの儀を執り行いたいと思います！」

またも歓声が上がる。

はて、自分はこんなにも村の皆に愛されていたろうか。

人口が少ないから見知った顔ばかりではあるが、皆普段はあいさつ程度しか言葉を交わさないし、同じ年頃の子どももいないから友人もゼロだし…………。

戸惑うリアの両肩を掴み、村長が上機嫌で声をかけてくる。

「さあリアよ。まず君には我が村に代々伝わる勇者の剣、これを抜いてもらおう」

「はい…………」

「そこで君には二つの道が用意されている」

「二つの、道…………？」

勇者の剣。幼い頃からこの高台の横にずっと刺さっていた剣だ。

突き出た柄の部分は劣化しないように村の者が交代で手入れをするなど、大切にされてきたのは知っている。

だが子どもはもちろん大人でも戯れに抜けるほどやわな刺さり方ではないので、方法を提示してもらえると安心した。

……まあ、僕が勇者の剣を抜けるだなんて思っていないし、半分以上は諦めているんだけど。

「二つの道。一つは【剛力】。読んで字のごとく、己の力のみで剣を引き抜くのだ。そしてもう一つが……」

村長の目がじろりと僕の身体を一瞥する。

少し口元が歪んだように見えたのは気のせいだろうか。

「【欲力注入】。他者の力を己が身体に蓄えて一気に放出し、剣を引き抜く力とすることだ」

「よくりよく、ちゅうにゅう……」

「真の勇者ならば、男の肉欲を意のままに操ることができるであろう」

村長の太い腕が僕の腰を抱き寄せてくる。とっさのことで、僕は大人しくその肉厚な胸に収まってしまった。

ガサついた大きな手が装束の中を這い回って、はじめての性的な接触に身体がジン……ジン……と疼いてしまう……………。

「やあっ……」

「ん～どうした？ 勇者になるのだろうか？」

「こんな恥ずかしいコト……皆の前でっ……」

「母親の治療費が手に入るんだぞ」

小声で耳打ちされてハッとする。

そうだ、僕はそのためにここにいるんだ。

お母さん、お金さえ払えばよくなるんだから、僕が治してあげないと……！

「な、なります、勇者に！！」

「良い心意気だ！ ムホ～～ッ♡」

「ああ～～んっ……」

胸を揉むような仕草をされて乳首をコリコリとされると、なぜか男の人たちの間から「オ～～ッ」とため息交じりの歓声が上がる。

皆、応援してくれてるのかな……。

視線が胸に集まっているのを見て気が付く。白装束は透けているから、布の下だろうと村長の指が僕の乳首を弄っているのは丸見えなのだ。

え、あれ……？

僕、女の子じゃないのに……もしかして、皆、僕に欲情しているの……？

モジ、モジ、モジ

恥ずかしくなって内股を擦り合わせていると、すぐに感づかれて開かされた。

下着をつけることも許されなかったので僕の股間の膨らみも皆には丸見えだ。

どうしよう、ちょっと硬くなってる……アアッ村長に擦られたらますますタツチャウ〜
〜……見ないで、皆……。

絶望的な羞恥に晒されながら、なぜだか身体がゾクゾクと萌える。

ああもう、身体中撫でまわされてる……布もはだけてほとんど裸だし……今僕、どんな格好で村長に辱められているのだろう……。

「ホレ♡ いよいよワシの欲を注入してやるゾッ♡」

「んぶっ！？ んん〜〜〜〜っ！？！？！？」

ブチュ〜〜〜〜〜〜〜ッ♡♡♡♡♡♡

ブチュッ！♡♡♡ ブチュッ！♡♡♡ ブッチュブッチュブッチュ♡♡♡♡♡♡

ブチュッ！ ンぱッ♡ ブチュッ！ ンぱッ♡

ブジュルルルルル〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡ ブジュルルルルル〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡

ああ、僕、村長にキス、されてる……。

ハジメテだったのに……こんなふうにつば、塗り付けられながら、むりやり奪われちゃって
……あれ……？ 変だな、腰が、ガクガクするようっ……♡♡♡

「んめっ♡♡♡ んめっ♡♡♡ オラ口開けろっ♡♡♡ これがワシのお前さんに対する
欲望じゃ〜〜ッ！！♡♡♡」

「んごがごっ……！？♡♡♡」

ああ、むりやり指で口、開けさせられて……つば、飲まされてる……？

村長なに言ってるんだろ、わからない……けど、これが剣を抜くために必要な力なんだ……
だったら、ちゃんと体内に取り入れないと……！

「んく♡ んく♡ んく♡」

「おお！♡ 飲んでる♡ いいぞお♡ もっとクッセエ中年男の唾液飲みなさいっ♡」

「ふぁいっ……ああ……ンン〜〜〜〜♡♡♡」

村長のつば、僕の胃の中に入ってく……はじめてだ、人の唾液を身体の中に入れるなんて…
…けど、これで力がつくのなら、ちょっと気持ち悪いけど我慢する……！

「んく♡ んく♡ んく♡ んく♡ んく♡ んく♡ んく♡ んく♡ んく♡」

「なんていい子なんだ！ えらいね！ ドロドロに蕩けちゃうくらいに気持ち良くしてあ
げるからネッ……！！♡♡♡」

「いやあああん……ンむっ♡ ンむっ♡」

突っ込んできた舌で口の中をグチャグチャにかき回されながら、おちんちんをギュウギュ
ウと握られて悶絶する。

おっぱいも触られて、なんだかすごくえっちな気分になってきちゃった……僕のことを見

て、パンツの中に手を入れてる男の人も何人かいるし……♡

「はあ♡ はあ♡ はあ♡ 村長さまあ〜……♡」

「エッチな顔だね♡ 気持ちいいのかい？♡」

「わかんないけどお……お腹の中がキュンキュンしちゃってますう……♡」

「ほお〜〜それはそれは♡ 例のモノを持て！ はよ！！！！！！」

そうやって指図する村長の声はほとんど悲鳴のようだった。

顔を真っ赤にして僕の上に押し掛かり、しつこくキスをしてくる。

ああ、村長のツバ、くさいけど、なんだか……好きになってきちゃったかも……♡

「村長様、お持ちしました」

「フタを開けてワシの手のひらにぶちまけろ！ 急げ！！」

「はい……！」

にわかに村長の手からヌチャヌチャと粘着質な音が響く。

そしてそれは太い指を介して躊躇なく僕のお尻の穴のナカに塗り込まれてしまった。

これはなに？ 薬？ 油みたいだけど……？

「これはな♡ 旅立ちの儀式専用の秘薬じゃ♡ これがあればお前はもっと淫乱に♡ グ
ヒョ♡ 楽しみながら儀式をまっとうできるからな〜〜♡」

「ああん♡ 指ィ♡ 多いれす〜〜♡♡♡」

滑りが良くなっているからって一気に二本も三本もぶち込まれて圧迫されてる……僕のお
尻の穴、ビクビクしてるよう……。

けど、なんかだんだん熱くなってきた……これが秘薬の効果なのかな……？

「ホレホレ♡♡♡ 長年をかけてお前のために練り込んできた極上の媚薬じゃ♡♡♡ 受
け取れい♡♡♡」

「ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん
♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ あ
あん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡
ああん♡♡♡ ああん♡♡♡ ああん♡♡♡」

ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡ ヌッポ♡
ヌッポ♡ ヌッポ♡

「ああ〜〜〜〜？？？？♡♡♡♡♡♡じんじんするれすう〜〜♡♡♡♡♡♡」

「もう我慢できん！ 挿れるぞ！！ リア！！ ワシが準備するまで、ガニ股開脚でヘコヘコして皆にメスチンコ見てもらいながら待っていなさい！！！！」

「はあい♡ へこ♡ へこ♡ へこ♡ へこ♡ へこ♡ みんな見てえ〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡」

「うおおおおお！！！！！！！！」

「リア！！！！！！！！！！ 俺のリア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「クソッこれで処女とかマジかよ〜〜〜〜！！！！！！！！！！」

「こんなことなら内緒でやっとけばよかった！！！！！！！！！！」

「無理だろ〜〜村長はリアが（ピーーー）歳の頃から目つけてたんだぞ！！！！」

皆の歓声が聞こえる♡ 何言ってるかほとんどわからないけど♡ 皆僕がちゃんと儀式できて褒めてくれてるみたい♡ うれしい♡ もっと褒められたい♡

腰振りを大きくするとまたもや歓声上がる。

僕はすっかりその気になって頭の後ろで手を組んで「フンッ♡ フンッ♡」って前後にいっぱい腰を振ってた。

先走り液がキラキラと輝きながら男たちに降りかかる。皆それを手や顔で受け止めて狂喜乱舞していた。

どうしよう、僕のえっちな姿で村全体がこんな異様な雰囲気になっちゃうなんて……♡ 気持ちいい♡ 見られるの、気持ちいいよう♡♡♡

「リア！！ お待たせ！！ さあシよう！！」

「ああん♡ 村長さま……♡」

「お前のハジメテはワシじゃっ！！ いくぞお……♡」

「お♡ お♡ お♡」

皆に見やすいように横向きで抱きかかえられて、村長が僕のお尻の穴におちんちんをちょんちょんとくっつけてくる。

なんでエッチな声出ちゃうんだろう♡ 穴も……すごく敏感になってる♡

「いくぞおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ズップンッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「おっ……………ほ……………？？？♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ああそんな、急に……なに？

僕のお尻に村長のおちんちんが、入っちゃってるの……？♡♡♡

「ぐぬう～っ♡♡♡ 辛抱たまらあん♡♡♡」

「ワシの欲望が溢れておる！ もっと受け止めておくれ、リアッツ！！！！！！」

「ふああああンッ♡♡♡♡♡♡」

両膝の裏から抱えられて、開脚したまま村の男たちに正面を向けられた。

そのまま後ろからズッポシとハメられて、僕はあられもない姿を全員に大披露してしまう。

「いやああああ〜〜〜〜んっ♡♡♡♡♡♡」

「リアッ！ 両手でピースしてべろ出してニッコリしろ！ リア〜ッ！！」

言われた通りにすると、見てくれている男の人たちが次々と射精する。

僕のえっちな姿で興奮してくれたんだ♡ えへ♡ 優越感すごい♡

村長のおちんちんかたい♡ いちいち僕のカラダを持ち上げて勢いよく突き下ろしてくる

♡ ブリブリ擦れる度に電流が走って頭バカになりそお♡

僕、これ、好きだ…………♡♡♡

なんだか、今日だけで一気に、大人になっちゃった気分…………♡♡♡

ドプププププッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「んぬおおおお…………♡♡♡♡♡♡」

「おほおん♡♡♡♡♡♡ おおおン…………♡♡♡♡♡♡」

お腹の中に温かいモノが溢れ出してくる……これが、欲力注入…………

すごい、下半身から力が湧いてくる……今なら僕、なんだってできちゃいそお…………

♡♡♡

「リア♡♡♡ お前が輪姦される場所を見せておくれ〜〜〜♡♡♡」

「はへ……？♡」

「おい皆！ 待たせたな！ 一列に並べ！！」

ズザッ！！！！！！

村長の号令とともに、お城の兵隊さんよりも統率の取れた動きで列が出来上がった。

長い、長い列……三十人くらいはいるだろうか…………。

もしかして僕、この人たち全員と…………？？？？♡♡♡

「リアちゃんっ！！ ずっと前から好きだったよ！！」

「んぶうう！？！？！？」

先頭に並んでいた男の人が間髪入れずにキスして前から挿入してきた。

僕はそのまま仰向けに押し倒されて、情熱的なぶちゅぶちゅキスを受け止めながらズンズンズンズン突かれてしまう♡♡♡

「リアよ♡ これから夜が明けるまで存分にマワ……いや、欲力を注入してもらいなさい♡
♡ それでお前はきっと伝説の剣が抜けるであろう♡ オイお前簡単に抜けるようにメン

テしといて」

「ふえ？ まだ夕方……オオオンッ♡♡♡」

僕が犯されている隣で村長が僕に説明をしているのか、誰かに指示を飛ばしているのか、とにかく悦に浸って喋っている。

一人目がすぐに欲力注入をしてくれて、二人目は僕を四つん這いにして後ろからガチュ♡ガチュ♡ 擦り倒してくれている♡

アアン気持ちいい♡ 頭がボーッとしてきちゃった……♡

「おおおおリア！！！！！！！！ この日のために嫁との子づくりセックス1か月我慢したんだ！！！！ お前に子づくり用濃厚ザーメン捧げるぞ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ああああああん♡♡♡ きて〜〜♡♡♡」

言葉の意味もわからないのに、奥さんより僕を優先してくれたのが嬉しくて自然とそう返事をしていた。

ドクッドクッドクッ……熱いのが流れてくる感覚に酔いしれる。

僕、これでまた強くなっちゃった♡

「リアとの子ども……♡ ふひ♡ ふひひひ〜〜♡ デュッデュッ♡♡♡」

「んおおおお♡ ありがどお♡ ございまひたあ♡」

「リア！ 次はコッチだ♡」

三人目が抱っこでハメてきた直後に、四人目と五人目が「ガマンできない！！」って叫びながら僕の両側に立つ。

僕は両手に勃起したおちんちんを握ってシコ♡ シコ♡ しながら下からズンズンされた♡

そのうちにお口にまでおちんちん突っ込まれちゃって♡ すごく生臭くて♡ でもいやじゃない♡ 僕にこんな気持ちいいことしてくれるおちんちん♡ だあいすき♡

「リアちゃん！ リアちゃん！ 俺の童貞ザーメン！ 飲んでくれえっ♡」

「俺はお顔にかけたい♡ リア可愛いよ！ リアッ♡」

「アア〜〜〜ッ出るッ……………！ キツキツ男児膣たまらんっ……………♡♡♡」

三人の射精を同時に浴びてからはもうあまり記憶がない。

立たされたり担がれたりとにかくいろいろな体勢で何度も何度も犯された。一番目の人は五回以上きたし、夕方だった時刻は朝を超えてもう一度夕方を迎えていた。

へとへと身体で伝説の剣に向き合わされ、いとも簡単に剣は抜けた。

欲力注入はほんとうだったんだ。僕はたくさんのお金をもらった。

お母さんは泣いて喜んでくれた。

治療費を稼いでくれたこと。

何より、僕が勇者として名誉ある旅立ちをすること。

その時、勇者ってのもまんざらじゃないかなと思えたんだ。

僕は非力だし、何もできないけど……………ほんとうのところ、この先もなんとかなる気がしているんだ。

……………強～～い仲間と、欲力注入してくれる男の人さえ居ればね♡



リア：勇者

普段は弱いが欲力注入時だけ最強になる。

ヨークに淡い恋心を抱いている。



ヨーク：戦士

無骨で無口で不愛想。勘違いされやすい。

リアを誰より大切に想っている。



シヅキ：僧侶

物腰が柔らかい超絶美形。

リアの愛らしさに傾倒している。



マノン：魔法使い

目つきと口が悪い。魔法の天才。

リアを見ると変な気持ちになる。

#2 山小屋監禁

～非力なフリしてレ◎プ願望を満たす勇者～

鬱蒼とした森の中。

薄暗くて魔物の気配も多いけれど、今の僕に恐れなどない。

旅立ってから間もなく、僕には出逢い酒場で頼もしい仲間が出来たのだ。

「リア、荷物」

「あ。ありがとう、ヨーク」

僕の手から半ばひったくるようにして荷物を請け負ってくれたのは戦士の【ヨーク】。

オレンジの髪と釣り上がった眉がいかに豪胆な戦士だ。

大きな体躯と巨大な剣を振る逞しさはオーラとなって周囲に立ち昇り、正直彼が隣にいてだけで賢明な魔物は姿すら現わさない。

無口で、あまり感情を表に出さないからぶっきらぼうに見えるけれど、ほんとうはいつも僕を気遣ってくれる。優しい人なんだよね。

「ヨークは相変わらず『リアにだけ』優しいですねえ。私も腕が折れそうなんです」

「……………」

これ見よがしに細腕を突き出してきたのは僧侶の【シヅキ】だ。

アクアブルーの綺麗な長髪と穏やかな笑顔はいつ見てもうっとりしてしまう。

かなりの大怪我でもたちどころに治してしまう彼も、やはり幼少期からかなりの修業を積んだと聞いている。

ヨークに無視されても笑みを崩さず「彼は筋肉バカだからいくらでも持たせておけばいいんですよ」と僕の頭を撫でて甘やかしてくれる。

二人の仲は心配だけど、ヨークもシヅキも大人だし、これからもっと仲良くなってくれるよね？ ……たぶん。

「あーやだやだ、皆リアには甘いね～。だからコイツいつまで経っても弱っちいままなんだよ」

憎まれ口を叩いてくるのは紫髪からイジワルな目を覗かせた【マノン】。魔法使い。

年齢的には僕の次に若いけれど、かなりの魔法の実力を持っている。なにせ普通は一種類操

れるだけで恵まれていると言われる自然系の魔法を数種類使いこなせるのだから、才能の賜物としかいいようがない。

彼だけは甘い上二人に対して僕につらくあたってくる時があるけど、僕がとぼけてニコリと微笑みかけると真っ赤な顔で押し黙ってしまう。どうやらとても恥ずかしがり屋さんらしい。

凸凹なメンバーに見えるけれど、それぞれが尖った特性を持っていて、冒険パーティーとしては非の打ち所がない。

どうしてなんの取り柄もない僕のもとにこんな優秀な人たちが集まってきてくれたのか不思議だけど、これも日頃の行いということにしておこうか。

———……！！！！！！

その時、森の奥から猛々しい雄たけびが聞こえた。

僕がもたもたと剣を構えているうちに、他の三人は足音を忍ばせてずんずんとそちらへ進んでいく。

近付くにつれて、それは獣や魔物の類ではなく、人の声だとわかった。

「ふざけんなよ！！　どこに目ェつけて歩いてんだ！！」

「すみませ……ひっく、ひっ……」

怒り狂っている男と、その正面に倒れ込んでいるのは……僕と同じ年頃の幼い少年ではないか。

どうやら今すぐ命の危機はなさそうだ。僕らは武器を納めるけど、監視の目はけっして緩めない。

「お前さんがぶつかってきたせいで商品がパーだ。落とし前つけてもらおうか」

どうやら少年の不注意によって、男の荷車の中身がすべてぶちまけられてしまったらしい。謝っているのに……男の怒りは収まることなく、むしろますます増していつている。

そこで突然、僕たちが介入する間もなく、男がとんでもないことをし始めた。

「落とし前をつけてもらわねえとなあ」

「んぐっ……！」

ボロン！　ガポッ！！

突然男がおちんちんを丸出しにした。

そして目の前にあった少年の頭を引き寄せて、無理やり、口に咥えさせたのだ。

少年は両手を宙に浮かせたまま、涙を浮かべて持たれた顔を前後させられる。

男はよだれを垂らしてその光景を満足げに見下ろしていた。

「オオッキもちええ～～～♡♡♡ やっぱり性欲処理は無垢な少年に限るナ～～♡♡♡」
「んん～～～！！ んん～～～！！！」

ガポガポガポガポガポガポガポガポ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

男の欲情した顔を見ていると、数週間前の出来事を思い出す。
村中の男たちに囲まれて身体を弄ばれた、あのエッチな儀式のことを……。
にわかに身体が熱く火照って内股を擦り合わせた。
「ソッ……」と思わず僕が漏らした声で我に返ったのか、三人は同時に飛び出して男と少年を引き離す。
「何をしている……！」
「まだ子どもですよ？」
「汚ねえオッサンだ！ ぶっ殺す！！」
そして三人ともあえて武器は使わず男をボコボコに殴り飛ばした。
僕が見かねて止めるまで、嫌悪にまみれたその制裁は止まらなかった。
「あれ？ この荷物……商品と言っていましたが」
シヅキが不思議そうに倒れた荷車を覗き込む。
「どれも腐っていて使い物にならない。潰して肥料にするしかない代物ばかりです」
「そんなもののために子どもを脅したってのか！？」
「……………不愉快だ」
またもやリンチが始まってしまった。
僕は改めて殺気立った三人を止めながらも、

【大人が子どもを騙して穢す】という構図に……
ゾクゾクと、身体の疼きを抑えることができなかった……♡

思えば旅立ってから半月あまり。
僕の仲間は強すぎて、僕に一切の危険が降りかかることはなかった。
それは対魔物でも、対人間であっても……対少年趣味のオジサンであっても。

男に犯されるという快楽を旅立ちの儀式で知ってしまった僕は、すっかり欲求不満になっていた。
また犯されたい。できれば手ひどく。無慈悲に。自分勝手に。

だけど必死に護ってくれる仲間の前ではそんなの言えるわけなくて、僕は今日のこともすっかり忘れようと努めた。

努めた、んだけど……………。

少年を送り届けた村に宿を取った、その日の夜。

僕は仲間に内緒で森の中に戻ってきていた。

なるべくみすばらしく、弱くて、おぼこい少年に見えるボロキレを身に纏って。

あの荷車の男はまだ伸びていたけど、僕の足音で目を覚ましたようで荷車の中身をせっせと拾い始める。

そこに少しの物音を立てて、できるだけ可愛い声で呼びかけた。

「あの……助けてくださあい」

「あん？」

男が振り返る。だけど、僕の風貌を見ると一気に口元が緩んだ。

おぼつかない足取りで男の元へと駆け寄ってわざと転んでみせる。起き上がる時に、男の肩に手をかけるのも忘れない。

「今しがた盗賊に追われて、命からがら逃げてきたところで……水を、いただけないでしょうか……？」

上目遣いで縫りつく。僕を可愛がってくれた男たちが喜んでいた時を思い出して、なるべくえっちに、甘えるような顔つきにした。

男の手が僕のローブの下にさりげなく手を入れて太腿を擦り始める。しめた。

「そうだなあ、坊ちゃん可愛い顔をしているし……ちょっとばかりキスでもさせてくれたら、恵んでやってもいいぜ？ これも商品のうちなんですね」

「あ……」

「んっ…！？」

ムチュ♡ ムチュ♡

ムツチュムツチュ♡

ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム
ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム
ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム ムツチュム

♡

啄み方がだんだん大胆になっていく。

中年男特有の生臭い口臭に頭がくらくらとした。

「んっ、ふ……だめ、ンツンツ……やめてえ……」

「抵抗するんじゃないエ」

ひた。不意に僕の頬に冷たいものが押し当てられる。

それがナイフだと気付くや否や、興奮で漏らしそうだった。

暴力で大人にねじ伏せられて純潔を奪われる、なんて……ああ、きっと気持ちいいに決まってる……もっと、もっと疊して欲しい……♡

「これ以上ケガしたくなかったら……わかるよな？」

「.....ッ.....」

「舌出せ」

ああ、武器も何もない僕は、この人の言うとおりにするしか……

自分の無力さに酔いしれながら、ぷるぷると舌を伸ばして男を見た。

分厚い舌が鼻息荒く絡んでくる。

はじめてじゃないけど、久しぶり……こうやって大人の男の人に強引にサレちゃう、キス…
…♡

まるで心が通い合っていない、ただ欲望を満たすためだけの汚らしい行為を無理やりさせられているなんて……。

———僕って、弱くてかわいそう♡

「ンッ♡ ンン♡ ンふっ♡ ん〜〜〜ッ♡♡♡」

ジュルッ♡ ジュルッ♡ ジュピピピピピ……♡♡♡

クチュクチュ♡ クチュクチュ♡ クチュクチュ♡ クチュクチュ♡ ンッンッ♡ ぎゅ
うっ♡ ほおおッ♡ ベロベロベロ！！！！んふうン……♡

男の興奮した息遣いと僕の誘う吐息が混ざり合う。

ますますキスが濃厚になっていく。

気付けば僕は男の膝に抱っこされて、僕からも男の首筋に縋りついてた。

そんな相思相愛な体勢で、夢中で唇を貪り合っていた♡

どんなに乱暴な人でもキスにだけは夢中になっちゃうの、可愛い♡ 僕にハアハアしてく
れる男の人全員、可愛い♡ メロメロの、トロトロにしてあげたくなっちゃう♡

「あはアン……♡ あの、そろそろ水を……♡」

「いや。お前さんには水よりもっといいモンをやるよ」

ボロン。出た、伝家の宝刀だ。

なんて茶化すわけにもいかない。さっそく後頭部を引き寄せられる。

男が興奮のあまり天を向いた瞬間に、自分から大きく口を開けてその生臭い棒を迎え入れ
た。

これ♡ これこれ♡ ずうっとしゃぶりたかったの♡♡♡

「んぶんぶっ♡♡♡ んぶぶ♡♡♡ がぽぽっ♡♡♡」

「おお、いい♡ 歯を立てるんじゃないぞ……そう、うまいじゃないか……♡」

この人、お昼からずっとおちんちんしゃぶって欲しくて仕方なかったんだよね。

なら、あの男の子の代わりに僕がたっぷりしゃぶってあげる♡

唇を丸めて、歯があたらないように、誠心誠意ご奉仕して……♡

僕におちんぽぶち込んで腰振りたくりたくなるまで、誘惑してあげるから♡

ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ
♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッ
ポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡
ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ
♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッ
ポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡ ガッポッ♡

ああ、妄想の通りだ……すぐに僕の顔掴んで勝手に前後して……♡

そんなに僕の口を犯せるのが嬉しいのかな♡ もう、雄臭さに溺れちゃいそう♡

「ぷあ……あ、もう、許してください……」

「休むな！もっとやれ♡（グイッ） おお♡ おお♡ おおー♡」

「んぶ、んぶ、んぶっ♡」

「美少年の喉奥締まる♡♡♡ おお〜〜最高♡♡♡♡♡」

僕のいやがる演技に男はますますヒートアップしていく。

チュポン、と自分勝手に抜き出して、

そして今度はなんと、僕のズボンとパンツをはぎ取ってきた。

「下脱げ♡ ならしてやるから♡」

「いや、何するんですかっ……(ぬぶっ♡) あ……あうう〜……！？」

「今からここをたっぷりおじさんのチンポで可愛がってやるからな〜♡」

「(ぬぶっぬぶっぬぶっ) ああっ、いやあ、やめてくださっ……あうう、こわいよお〜……(グスグス)」

「大丈夫♡ すぐに気持ちよくなるからね♡ ほらもっとお股開いて(パカっ♡) 」

「ああいやあ…あ…きんっ…！？♡」

おあいにく様。指でサレただけで泣いちゃうほどもう純じゃない。

だけど僕のあからさまなウソ泣きでもオジサンすっかりその気になっちゃったみたいで、
乱暴に指を後ろに出し入れしてくる♡

グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡
♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡
グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡
♡ グチュッ♡ グチュッ♡ グチュッ♡

「アッアッ♡ ああん♡ あついい♡ あついいおっ♡」

「ほお〜〜ここがいいのか♡ 素質あるんじゃないのか？ え？♡（グリグリ♡） 」

「あっあっあっ♡ やめ♡ やめてえっ♡」

「イイ声出すじゃないか♡ それじゃあやらせてもらうぞ♡（ズプッ…♡） 」

「あ……！♡」

おチンポ入ってきた……♡

四つん這いで、外なのに下半身丸出しで、挿入…………♡

あはあああん〜〜…………僕まだ子どもなのに、こんなの〜〜♡♡♡

「おほおおっ♡♡(ズプズプ♡)」

「あっそんな♡ 一気にイ♡」

「おお♡ こんなにすんなり美少年とやれるとは♡ たっぷり楽しませてもらうよ〜〜♡

(ズップズップ♡) 」

「あっあうっ♡ あうあう♡ やらああああ♡ やめてえええ♡」

鼻息が荒い……おじさん、大人なのに……僕みたいな子どもに興奮してるんだ……♡

ヘンタイ……裁かれるべき、罪人……だけど♡

こんな理不尽なことがまかり通っちゃう♡ 汚い世の中だから♡

僕なんてもうとっくに穢されて戻れないんだから♡

今日だけは、悪いコトだって許しちゃうよ♡

あああ、早いい〜〜♡♡♡ もっと、もっとお尻叩きながら、ズンズンしてえ〜〜♡♡♡

「(カクカク♡ カクカク♡) 君すごく可愛いねっ♡ 街で見かけたことないけど……どこから来たの？ いくつなの？♡」

「あう、あう、じゅ、じゅう(ピー) れすうう♡」

「じゅう○○！？ (パンっ！) ストライクゾーンだ！ 顔もモロ好みだよ♡ 最高だ〜♡ (パンパンパンパンっ♡)」

「あっ、あはあっ、やめてへえ……おじさんだめえ……！！」

「ダメって言われると余計にやりたくなるのが男ってもんだよ♡ (ズプッ♡ ズプッ♡)」

「いやあ♡ やだやだやだあ…！♡」

ああん♡ ひっくり返されちゃった♡

もうぜんぶ脱がされて、全裸、じっくり見られながら……♡

胸撫でまわされて、脇、舐められて♡ 腰を下から持ち上げられて♡

ああ〜〜〜〜パンパン止まらない〜〜〜〜ツ奥きもち〜〜〜〜イン♡♡♡

「ほらもっと足開いて♡ そうそう♡ (ズップズップ♡) あーこりゃいい♡」

「やあん♡ やめてっ♡ やめてえっ♡」

「もっとだね♡ わかったよ♡ ほれっ♡ ほれっ♡ ほれっ♡ (ズプズプズプ！！)」

「ああーんっ……！♡ (くたあ……)」

スタミナ切れのふりをして脱力する♡

おじさんはいよいよ僕を人形みたいにバコバコ自分の股間に打ち付けて思いのままにレ◎プしてくる♡

レ◎プ♡ なんだ♡ これ……♡

同意してないもん♡ 犯罪されちゃってる♡ それなのになんでこんなキモチイイの♡

ばく悪い子なの？♡ わるいこ♡ わるいこわるいこわるいこォ♡♡♡♡♡♡

「中に出すぞ！ 受け止めろォ！！ それっ！（ドピュピュ♡）」

「あ……あ……♡ はぁあん……♡」

「やり足りない……ハアハア♡」

あ……おじさん、すごい見てる……ぼくとまだセックスしたいんだ♡

ぼくもしてほしいよ♡ してして♡

さりげなく自分の萎えたおちんちんをモミモミして見せつける♡

そうするとおじさんは「ウヒョ♡」って飛び上がって僕を抱っこしてくれた♡

「さっきは邪魔が入ったからなあ……そうだ！ 近くに小屋があるんだ、人の出入りもないしそこでゆっくりやりまくろう♡」

「あ……いやぁ～……」

弱々しい声を出しながらも僕の頭はエッチでいっぱいだった♡

今から山小屋で監禁されて何回もサレちゃうんだ♡

どうしよう♡ ぼく興奮して、自分から腰振っちゃうかも♡

バン！

小屋の扉を開け放つと、さっそく閉めたドアに押し付けられて♡

ズニュウ～～～ッ♡ 後ろから、挿入♡

顔が見えないのをいいことにべろ出して悦んじゃう♡

アッ♡ アッ♡ はじまっ♡ たぁ♡

後ろから全身ナデナデされて♡ 強引に振り向かされて♡ キス♡

ンッ♡ ンッ♡ はぁはぁ♡ ンッンッ……♡

ネトネトしたおじさんのツバ♡ あぁもう顔面ぜんぶに塗りたくられてる♡♡♡

「んめ～～～♡♡♡ うひょおおおっ♡♡♡（パンパンパンパン♡）」

「あぁ～～～♡♡♡ もう～～～♡♡♡ やだぁ～～～♡♡♡」

「おお♡ おお♡ ここならいつまでもセックスできるよ♡ 幸せになろうね♡」

「あぁん♡ あぁん♡ やだ♡ おうち帰してえ……！」

うそだよ♡ もっと♡ もっとして♡ もっとしてー♡

心の中で懇願しながら無抵抗で犯される♡

あぁしゅごいはいん♡ お水ちょうだいって言うただけでここまでサレちゃうなんて♡

いつまでサレちゃうんだろう♡ もしかして朝まで……♡♡♡

「よーし、一応人に見つかった時の練習をしておこうか♡ レ◎プされて恥をかくのは君だからね♡ おじさんとは自分の意志でセックスしてるって、ちゃんと説明するんだよ♡」

「あう、あう……いやだよお……せっくすいやだよお……たすけて……」

「言うこと聞かないとグサッといくよ？」

「ひいん、ひいん……ごめんなさい、ゆるしてえー……」

ナイフを頬にあてられてゾクゾク震えた♡

誰かに見つけてもらっても逃げられないなんて♡

それも、こんな名前も知らないおじさんの恋人だと思われるなんて♡

ああ～～～んもう何もかも終わりだよお♡ ……………ウン、興奮する♡♡♡

「それじゃあおじさんとのセックスを幸せだと思いなさい♡ ほら♡ 小屋に入ってきた人に説明して♡」

「あ、うう……ぼく……自分の意志でこのおじさんとセックスしてますう♡ レ◎プじゃないです♡ らぶらぶセックス、気持ちいいれすうう♡♡」

「おお♡ 上手じゃないか♡ おじさんその気になっちゃうよ～♡ (パンパンパン!)」

「あうう、そこっ、そこおっ、ひもちいい♡♡」

「うーん♡ おじさんも気持ちいいよ♡ (グリグリ♡)」

「あはあああん♡ もっと♡ もっと♡」

ウソつかされて犯されて♡

ヨすぎてつい本性出ちゃう♡ おねだりしちゃう♡ もっと無知なフリしてレ◎プされたかったのに♡

けどおじさんまだ演技だと思ってくれてる♡ だから抱きついてべろ差し出した♡

僕が求めた通り、おじさんはスケベな顔してべろ絡めてくる♡

「可愛いの～♡ ほれべろちゅーしよ♡ (れろれろ♡)」

「れるれる♡ おじさんすき♡ だーいすき♡」

「おお！ 演技でもうれしいよ～！ (チュクチュク♡ パンパンパン!)」

「んん♡ んぶはあ♡ ああもっと♡ もっとセックスして～♡ レ◎プきもちいい～♡(カクカク♡)」

「すごい好き者だね♡ 腰すごい動いてる♡ えっちだよ～♡ (ズプッ♡ ズプッ♡ ズプッ♡)」

もうどこからどこまでが演技なのかわからない♡

ううん、全部ほんとう♡ 僕はムリヤリエッチされたいスキモノ♡

おじさんも僕もヘンタイなんだ♡ だってお互いの名前も知らないのにこんな山小屋で裸になってグチュグチュパンパン♡ ペロペロペロ♡ ズコズコズコズコ♡

僕らは延々と初対面セックスに溺れてしまった。

おじさんはどうやら満足しきったみたいで、おとなしく僕を解放してくれた。

けど名残惜しそうに、いつまでも僕の口をナメナメしている♡

「ん〜ペロペロ♡ ペロペロ♡ またおいで♡ いつでもハメハメしてあげるよ♡ ペロペロ♡ ペロペロ♡」

「ソッ♡ ねえおじさん……僕、旅をしてるんだ。旅立つ前にもう一回、会おうね♡」

「おおっ♡ ぜひ頼むよ♡」

そんなふうにされたら僕も名残惜しいから♡

だから最後に【思い知らせて】あげる♡

そしたらおじさん、もっと気持ち良くなってくれるはずだから……♡

明け方に宿のお風呂に入って、皆が起きる前にベッドに滑り込んだ。

何食わぬ顔で旅支度を整える。そしてまた、あの森へと足を踏み入れた。

獣の咆哮。最初とは違い、誰より先に反応したのは僕だった。

力が漲る。欲力が身体に蓄積されているからだ。

駆け抜けて、凶暴化した獣を一刀両断する。

慌てて追いかけてきた仲間たちは全員あぐりと口を開けて、真っ二つになった亡骸を見下ろした。

獣に襲われそうだった商人の男に、僕は手を差し伸べた。

「大丈夫でしたか？」

「……………！！！！！！ ………………！？！？！？！？！？」

先程まで僕を好きに犯していた男だ。

僕が勇者の証である立派な剣を携えて、それなりの旅着を身に纏い、強そうな仲間たちを引き連れている様子に口をぱくぱくしていた。

いっこうに手を取ろうとしないので、微笑みを浮かべたまま引っ込める。

ヨークが男の顔を確認すると、遠ざけるように僕の腰を抱いて歩み始めた。

「……ああいう輩には関わるんじゃない」

「ふふ、はい♡」

「ねえ！ 今の力！ どういうこと！？」

「リア、あなた一体……」

皆に気付かれないように後ろを振り返り、呆気にとられるおじさんを見た。

目が合うと、口元に人差し指をあてて「ナイショ♡」のポーズ。ふふ、これで口止めはできたかな♡

仲間たちには「力が出る日のごくまれにある」とだけ伝えておいた。

僕が【勇者】と呼ばれる立場だと気付いた男は驚きながらも、薄ら笑って勃起していた。

僕がいなくなった後も、こんな強い僕をメチャクチャに犯したコト思い出して、いーっぱい……シコシコ、してくれるかな……？♡♡♡

#3 宿代足りず NTR 払い

～好きな人と手を繋ぎながら宿屋の店主に犯される～

「ヨーク！！」

血まみれの仲間に駆け寄る。

すでに意識はない。かろうじて息をしている。

それだけを頼りに僕はかたくその手を握った。

傍らのシヅキがヨークに回復魔法を施している……。

敵は、マノンが強力な炎の魔法で撃退してくれた……。

———元はと言えば僕が油断していたからだ。

周りを警戒せずに話に夢中になっていたら、背後から魔物に襲われた。

ヨークはそんな僕を庇ったのだ。

勇者だなんだと持て囃されて、仲間も強くて、それにいざとなれば僕には男の人に性を注ぎ込んでもらって使える【欲力】がある。だから、慢心していたんだ。

実際はどうだ。欲力はとっくに尽き果て、肝心な時に仲間を守ることすらできない。

いつも、いつも、いつもいつもいつも、僕はお荷物だ……………。

「リア。ひとまずヨークを近くの街まで運びましょう」

「……泣いてんじゃねえよ」

マノンがいつになく優しい言葉をかけてくれる。

今は僕が慰められている場合じゃないのに。情けないな。

「おろ。その人！ ケガしてんの？」

聞き慣れない声が飛んでくる。

駆け寄ってきたのは若い男の人だ。

ヨークを見るとすぐにシヅキと反対側の肩を支えてくれた。

「助かります。私一人ではと途方に暮れていたのですよ」

「気にすんなくて。ほら、お前さんも元気だしな」

ポン、とお尻を叩かれて意識がはっきりとした。

そうだ。子ども体型の僕とマノンではヨークを運ぶのを手伝えない。

親切な人が通りかかってくれて、よかったな。

「ありがとうございます……」

「とりあえず街の宿屋に運ぶぞ。すぐそこなんだよ」

どうやら彼は僕らが目指していた街の人間らしい。

スムーズに案内してもらったおかげで難なく宿でヨークを休ませることができた。

シヅキが治療を続ける中、僕とマノンは宿屋の主人に料金を払いに行く。

そこでようやく僕は、重大なことに気付いた。

「財布が……ない……？」

支払いを催促されて懐を探ったら、ないのだ。腰に下げていた革袋が。

あそこには僕ら四人の資金を全て入れていた。

落としたのだろうか。いや、しっかり括りつけてあったはず。

結んだ紐に鋭利な切り口があることに気付いて突然ピンときた。

ヨークを運ぶのを手伝ってくれたあの男……………泥棒だったんだ。

やられた。

顔面蒼白の僕を見て、マノンが心配そうに覗き込んでくる。

「リア……？」

「取られた……財布を……」

「おやおや、お気の毒に。最近この辺ではスリが横行していてねえ」

「マジかよ、どーすんだよ。ヨークがああ調子じゃあすぐには」

「ふーむ……タダで泊めてあげられないこともないがねえ」

ここで宿屋の店主の鶴の一声。神様かと思った。

僕とマノンは乞うように見つめる。そんな僕らを宿屋の店主はなぜか見比べるように交互にじっと凝視した。

「そっちの紫髪の子も捨てがたいけど……やっぱりピンク髪の君かな♡」

「わっ!？」

強く手を引かれて引き寄せられた。

マノンが何か言いたげに手を伸ばしてくるけど、強い視線で制する。

「君にウチの仕事を手伝ってもらおうか。お仲間さん達はお部屋でゆっくりしてくれていいよ」

「手伝います、俺もッ」

「結構だよ。私はこの子に【だけ】手伝って欲しいんだ」

マノンを突き放すような店主の態度。これ以上詰め寄るのは得策ではない。

『大丈夫』というメッセージを込めて頷くと、マノンは諦めたように部屋に戻っていく。
二人きりになった途端に、店主は豹変した。

ぶちゅぶちゅぶちゅ！！　ぶちゅちゅちゅちゅ～～～～～っ♡♡♡

何の断りもなく、唇を奪われたのだ。

そうだと思った。この人、最初から僕を見る目がエッチだったし。

仲間もいる宿の中で……なんて気が進まないけど、どうやら従うしかない。

ヨークにはゆっくりと休んでもらわないと。

もとはと言えば彼のケガだって僕のせいなんだ。僕が責任を取らないといけない……。

「ン～～♡♡♡　抵抗しないのかい？♡♡♡」

「なかま……とまらせて、ソッ、くれるなら……ソッソッソッ……♡♡♡」

「もちろんだよ♡　ホラ下脱いで！　さっそく繋がろう！！！！！！」

「えっ……あの、ここ、いつ他のお客さんが来るか……」

「こんな早い時間に誰も来やしないよ♡　そんなに心配ならホラッ、カウンター裏でやろう♡♡♡」

なんてせっかちなおじさんだろう。

手をひかれカウンター裏に連れ込まれた。

お尻を突き出した状態で、立ったままあっけなく挿入されてしまう。

ヌプププププッ……………♡♡♡

「あはあ～～～～んっ……………♡♡♡」

「艶っぽい声だな♡　男慣れしてるんじゃないのか♡　さてはあの三人の中に彼氏がいるな？♡」

「アッアッ♡♡♡」

久々の挿入にめいっぱい感じながら、グッと頭を上げてみる。

なるほど。僕が頭を下げていれば完全に隠れられるし、他のお客さんの位置からは店主が普通にカウンターに両手を置いているだけに見える……はず。

僕にとって一番最悪なのは自分の仲間に見られることだ。それだけは絶対にイヤだ。

ヨーク……僕がこんなことになっているのを知ったら、自分を責めるだろう……。

僕は淫乱な変態だからこんなの慣れてるのに。むしろ欲力を注入してもらって、悦んでいるのに。

……………絶対に、知られたくない。

「なあ、オイ！！　どれと付き合ってるんだ！？　ン～～！？！？♡♡♡」

「だ、誰ともお、付き合っ、ません♡♡♡」

「ウソをつくな♡　もしかして三人全員にハメさせてるのか？　エロエロホモセックス旅か！？♡」

「ち、ちがうう……みんな、ほんとに、なかまでえ～～♡♡♡」

「じゃあ全員に気を持たせて遊んでるのか♡ 悪い子だ♡ ありゃ～全員お前にコレしたくてムラムラしてるぞ♡ すごいフェロモン垂れ流してるもんなお前♡」

「ちがうのお～～～ッ♡♡♡ ぼく、ぼくうう♡♡♡」

次第に激しくなる打ち付けにバランスを崩して倒れ込む。

助け起こされた僕は、カウンターを背にしてもたれかかった。

店主の目を見て、なるべく甘い声で、囁く。

「僕がエッチするのは、おじさんみたいなヘンタイさん……だけ♡」

「おおっ！？！？♡♡♡」

「ここにいる間は、好きなだけ、犯してください……♡」

「おおお～～～～～っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

パソコンパソコン！！！！！！！！！！

固定されているカウンター台が外れるくらいの勢いで、前挿入からの激ピストンが、始まってしまった。

しまった、やりすぎたかな……。

とはいえ求められるのはやっぱり嬉しい。

僕はオープンスペースで、思いっきり宿屋の店主に身を委ねてしまった♡

店主の気が済むまで犯された後、仲間のいる部屋へと戻る。

ヨークは依然目を覚まさないらしい。

部屋に居るのは眠ったままのヨークと、休憩しているシヅキだけだった。

「あれ。マノンは？」

「やることもないし街に出ているんでしょう。まったくいい気なものです」

「シヅキ、ありがとうね……僕のせいでこんなことになったのに」

「リアが謝ることはありませんよ。これはヨークのミスなんですから」

シヅキは腕組みをして憎らしそうにヨークを見やる。

確かにこの二人、あまり仲が良くはない……。

だけど僕は知っているんだ。

ヨークがやられた瞬間、シヅキは必死の形相で治療をしてくれた。

回復魔法は疲れると口癖の彼が、半日を費やして汗だくでずっと付きっきりでいてくれた

のだ。

少なからず、仲間意識はあるのだと思う。

「シヅキは優しいね。仲間想いだし。尊敬するよ」

「……………そんなんじゃないんですよ」

ふ、とシヅキの横顔に影が差す。

首を傾げて言葉を待っていると、ふいに後頭部に手が添えられた。

真剣なまなざしが、至近距離で僕を射抜く。

「ヨークが死んだらあなたが悲しむから、頑張っただけです」

「え……」

「ご褒美、くれますか？」

えっえっえっ。どういうことだろう。

ヨークが死んだらそりゃ悲しいよ。けどそれじゃ、シヅキはヨークのためというより、僕が悲しまないためだけに頑張ってくれていたの？

いやあ、それはさすがに照れ隠しがすぎるだろう……。

「……ご褒美、何がいい？」

「キス、とか」

目を覗き込んで言うと、覗き込み返された。

いつもは俗さを感じさせない静謐な瞳が、少しの欲を浸しているのが見える。

もしかしてシヅキ……シヅキも、僕に下心があって……？

熱くなった頬を包んでモジモジしていると、シヅキは焦ったように手を離す。

「ごめんなさい。からかっただけです」

「え。別に、キス、いいけど……………」

「えっ？ え、じゃあ……！」

諦めかけたのに、僕の一言でおずおずと顔を近づけ直すシヅキ。

可愛い。顔が綺麗としか思っていなかった彼に対して、はじめてそう思った。

「ちょっと、恥ずかしい、な……」

「あっ、もちろんほっぺで！ ほっぺでいいですよ！？」

「あ～～……」

……当然、唇にする気でいたのに。ちょっと残念かも。

とはいえ今さら強引に唇を奪うわけにもいかない。

チュッ

差し出された頬に唇をつけて、軽く弾く。

シヅキは真っ赤な顔を誤魔化すようにヨークを向いて、僕の視線から逃れようとしていた。

「お、起きてないですよ」

「ふふ、うん」

「ほんとうはもっとあなたとこうして仲良くしたいのですが……ヨークがいつも目を光らせていますからね」

「そう？」

「そうですよ。少しでもあなたに触れようとすると殺意むき出しで睨んでくるんですから」あの優しいヨークが、そんなことをする筈なのに。

シヅキは何か勘違いをしているんだろうな。

それにしても、ほんとうに仲間とまで性的な目で見られていたなんて。

これってちょっと嬉しい……………かも？

「ヨークには悪いですが、今のうちにもっとリアに近付きたいです」

「へへ。なんか照れるな……」

「あ、もちろん仲間としてですよ？ 仲間として！」

「ふふっ」

「……………あの、手を繋いでも……？」

「もちろん。いいよ」

ギュッ。しっかりと手を握ると、シヅキは恥ずかしそうに俯いてしまう。

こんな綺麗な人が、まさか本気で僕を好きだなんて……意外過ぎる。

その後は沈黙が続いて気まずかったから、思い切って指を絡める繋ぎ方に変えてみた。

にわかにシヅキの手が汗ばむ。

結果、もっと気まずい空気になってしまった……。

ピチョツ、ピチャツ、ジュブプツ……♡

不審な水音で目が覚める。

なんだか口元が温かい……それに、なんか全身が熱い……？

「わあっ……！」

大声を上げてしまい、自らの手で口を塞いだ。

今は仲間たちと同室で就寝中。疲れた皆を起こしてしまうのは忍びない。

だけど心臓は鳴り止まなくて、ただただ疑問符を浮かべて見上げた。

深夜の訪問者——この宿屋の店主の姿を。

「起きたね♡ さあ昼間の続きをしよう♡」

「へ！？ なんてっ……」

「ここにいる間は好きなだけ犯してくださいって言ってたじゃないか〜♡」

確かに言ったけど……！

まさか4人部屋に堂々と夜這いに来るとは思わないじゃないか！？

動揺している間にも手を剥がされてブチュブチュと唇を啄まれる。

布団の中で下半身はすでに脱がされて、がっちりと店主の脚で拘束されている……。

「うう、わかりました……じゃあ別の部屋にっ」

「いや、ここで抱くよ♡ 仲間にバレちゃうかもしれないスリルの中で犯してあげたくて、わざわざ部屋まで来たんだから♡」

その言葉が悪夢過ぎて一瞬理解できなかった。いや、脳が拒んでいたんだと思う。

仲間にバレちゃうかもしれないスリルの中で……！？！？

絶対にイヤだ。皆、僕を弟のように可愛がってくれているのに。

僕が誰にでも股を開く淫乱だと知ったら、幻滅して離れていくのは必至だ。

それだけは、絶対にイヤだ……！

「おーおー♡ いい暴れっぷりだねえ♡ 屋は完全に受け入れ態勢で歯ごたえがなかったから♡ これくらいが燃えるんだよ〜〜♡」

実に勝手な言い分で続行しようとしてくる。

正直、昨日この人に注いでもらった欲力で撃退することはできるけど……。

なにせ超パワーなのでコントロールが難しい。っていうかこんな狭い部屋で力を解放したら絶対に全員起こしてしまう。

それに欲力は剣に込めるのが基本だ。今、武器は手元にない……終わった。

「イヤよイヤよも好きのうち……ってね♡」

「ア！」

もう布団の中でチンチンあてがわれている。

挿入されちゃう。皆がいるのに……！

「ほ〜〜ら、観念して仲間の前でメスになっちまいな……よ！」

ズブンッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「……………！」

両手で口を覆って声を我慢する。

それでも容赦なく襲ってくるピストンに悶絶してしまう。

ああ、ズルズル出し入れされちゃってる……正常位で……顔覗き込まれて……。

きっと僕、変な顔してる……皆にバレたくないのに、気持ち良くって……恥ずかしいのに、

もっとしてほしくって……ああ、まさかこんなことになるなんて。

ああ、気持ちいいよう♡ けどダメ。感じちゃダメ。

僕は皆の前では、穢れなき勇者でいたいんだから……だから、ダメ……！

「ほっほ♡ いい顔だ♡ 見られたら一発アウトのキスハメしような♡」
「ンぶ〜〜〜〜ッ♡♡♡」

パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡
パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡
パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡
パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡
パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡
パンパンパンパンパン……ジュルッチュッチュッチュッ♡♡♡♡♡♡

「お前マジで仲間にやらせてないんだな♡ それなのにゆきずりのおじさんにはキスもハメハメもさせ放題なんて♡ 反省しろ♡ 売女めっ♡」

「ン〜〜♡♡♡ ン〜〜♡♡♡ ふはあっ！ アッアッアッアッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

どうちよう、その言葉責め、くる〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

シヅキは僕のこと好きなのに♡♡♡ 手を繋いだりほっぺにキスしてあげるだけで真っ赤になって照れちゃうのに♡♡♡ こんな今日会ったばかりのおじさんには口の中ベロベロさせてお腹の中ズンズンさせて悦んでるなんて♡♡♡ おかしいおかしいおかしい♡♡♡ 僕、ほんとうにおかしいんだ……………ヘンタイなんだ……………♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「アア〜〜ッ！ アア〜〜〜〜ッ！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「バカ！ うるせえっ……！」

つい我を忘れて喘いでしまった。おじさんが慌てて僕の口を大きな手で覆うけれど、ヨークが反応したように身じろぎし始める。

「やべっ」とだけ呟いておじさんは掛布団の中に隠れた。

どうしようどうしようどうしよう。焦っているうちにどんどんヨークの瞳が開いていく。

やがて僕の顔を捉えると、ふにゃ、っと小さな子どものように、笑った。

え……！？！？！？！？！？

今のなに可愛すぎるんですけど……！？！？！？！？！？！？！？

「りあ……」

「あ、ヨーク起きたの……よかつ……ンッ♡」

せっかくヨークが目を覚ましたのに……布団の中で、乳首舐められてる……♡

なんで？ 感動の再会なのに……それに僕は今、おそらく自分の大切な感情に気付けたのに……………。

なんで、こんな決定的瞬間に他の男に挿入されたまま、乳首舐められちゃってるの…
…????????

「りあ」

「ン、ヨーク……♡」

おぼつかない仕草で手を伸ばすヨークの手を取る。

しっかりと握って、今しがた自覚した自分の気持ちを実感しようとした。

ヨークの手、遅しくて、あったかい……ああ、大切だ……。

友達じゃない、仲間？ ……よりももっともっと大切に、切なくて、そんな……。

「オオオッ？♡♡♡」

あああ、ピストン再開されちゃってる〜〜〜〜……♡♡♡

ヨークとしっかり手、繋いでいるのに……♡♡♡

布団の中に隠れたおじさんに、それ以上の強さでもう片方の手を握られて♡♡♡

自分のほうが僕のカラダを支配してるんだぞって言ってるみたいに♡♡♡

振動を抑えた奥への深めピストンで主張されちゃってる……！♡♡♡♡♡♡

「ん……？ リア……？」

「えへ、ヨーク、よかった……心配っ、したんだ、よっ？♡♡♡」

「すまない……」

「カッコイイね、すき……守ってくれて、ンッ、ありがとお……ッ♡♡♡」

「ふふ……」

嬉しそうに微笑みながら、ヨークはスヤアと眠りに落ちていく。

完全に覚醒してなくてよかった……アッアッ乳首♡♡♡ 強めに弾かれちゃってるッ♡♡♡

抗議しようと布団を覗き込むと、おじさんが飛び出してきてがばりと被さってくる。

そして粘着質なキスハメをされた。

僕とヨークが手を繋いだままでいられるように……僕が罪悪感をかんじながらも、スリルを味わえるように……なんて、ゲスな大人なんだろう……♡♡♡♡♡♡

「んふ〜〜〜ッ♡♡♡ ンジュッンジュッ♡♡♡ もごもご♡♡♡ もごもご♡♡♡ アッアッアッ♡♡♡ そこおらめっ♡♡♡ チュプチュプチュプ♡♡♡ レロレロレロ♡♡♡ レロレロレロ〜〜〜ン♡♡♡ アッだめ♡♡♡ だめエ〜〜〜ッ♡♡♡」

この男は確かに最低だ、だけど……。

ヨークの体温を感じながら、他の男のキスハメに溺れてうれしそうに舌まで絡めちゃう僕のほうが、最低なのかもしれない……♡♡♡

「ハアッハアッ♡♡♡ もうほんとにだめ♡♡♡ お部屋変えてくださァいンッ♡♡♡」

「え〜ほんとにいいの？ 感じてたくせに〜〜♡♡♡」

「お、おねがい……どんな体位でも、どんなプレイでも、しますからあッ……♡♡♡」

「おほ♡♡♡ 待ってました♡♡♡ じゃあ全裸になって駆弁しながら移動しようねッ♡♡♡」

「あへえ〜〜〜もう好きにしてえ〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡」

聞いただけでいやらしすぎて絶頂してしまった。

言われた通りに抱っこのエッチされながらおじさんの部屋まで移動する。

そして僕はされるがままに、朝まで変態プレイに付き合わされちゃったんだ……♡♡♡

早く、部屋に戻らないと…………♡♡♡

ようやく眠ってしまった店主を横目に、シーツだけ裸に巻き付けて廊下に出る。

そこで隣の部屋から出てきた人とバッタリ出くわしてしまった。

「アッ！」

「…………リア？」

そこに居たのは意外な人物だった。

マノン。なんだか服がヨレているし、顔が濡れている……？

そういえばマノン、昨日僕が夜這いされている時、部屋にいなかったような……？

「なんだよそのカッコ……もしかして手伝って」

わなわなと震えるマノン。どうしよう。何も言い訳が浮かばない。

どうかそれ以上追及しないでくれと目で訴える。

そこでマノンの顔を凝視した僕は、気付いてしまった。

「マノン、口元に何かついてるけど……」

「へ……？」

「あ」

陰毛、だ。

……………????????????????

「おッ。可愛いちゃんが揃ってるじゃ〜ん♡」

頭上から軽薄な男の声が降ってくる。

マノンが出てきた部屋からグイッと身を乗り出しているのは若い男。

…………あの、スリだ……！?!?!?!?!?!?!?!?!?

「あのっ！ 僕たちのお金……!!!」

「リア！ いいから！」

「なんで！？ マノン、あそこには君のお金も、」

「返してもらったから！！！！！！」

返してもらった、って……………え、スられたお金を……………？

「返して、もらった……だからもういい、戻るぞっ」

「あ、なんでっ」

それから部屋に戻るまでの短い間、何を聞いてもマノンは答えてくれなかった。

ただただ陰毛がついていた口元をしきりに拭って、少しえずいていた。

部屋に戻ると慌ててお風呂に入る。

マノンも脱衣所でなんだか必死に歯を磨いていた。

ヨークは起き上がれるようになったので、もう出発できるという。

無理はしないように言ったのだけど「早く行こう、早く」とマノンが譲らないので早々に旅立つことを決めた。

ヨークに隠れてシヅキと少し甘いアイコンタクトを交わしながら、僕は「ちょっと待ってて」と部屋を出た。

どうしても確かめたかった。マノンが昨夜、何をしていたのかを。

カウンターまで来てサッと身を隠す。

だってそこには宿屋の店主ともう一人、なんとあのスリの男がいたから。

二人は朝から酒を煽って、なにやら上機嫌に話している。

「いやあ、今回ののは特に上玉だったなあ♡」

「残念だったなオヤジ。ムラサキちゃんもスゲーウマかったぜ♡」

「いやいやあのピンクちゃんには敵うまい♡ なんせどすけべのド淫乱♡ おっほ、思い出ただけで鼻血出そう♡」

「俺がスってオヤジが強請る。これでモノにできないシヨタはいないっしょ♡」

「だな♡ いや～～久々に燃えたナ～～♡」

なんだって。

つまり、この二人は父子で、二人とも少年趣味で。

今回僕らにやったような手口で常習的に男の子にエッチしているというのか。

僕はまんまと罠に堕ちたんだ。
そしておそらくマノンも……………。

僕は何か食わぬ顔で部屋に戻った。
そしてまた元通り、四人で旅立った。
腰の革袋を括りつけた紐の結び目は、僕とマノンの苦い思い出になった。

体験版はここまでです。
続きは製品版でお楽しみください。